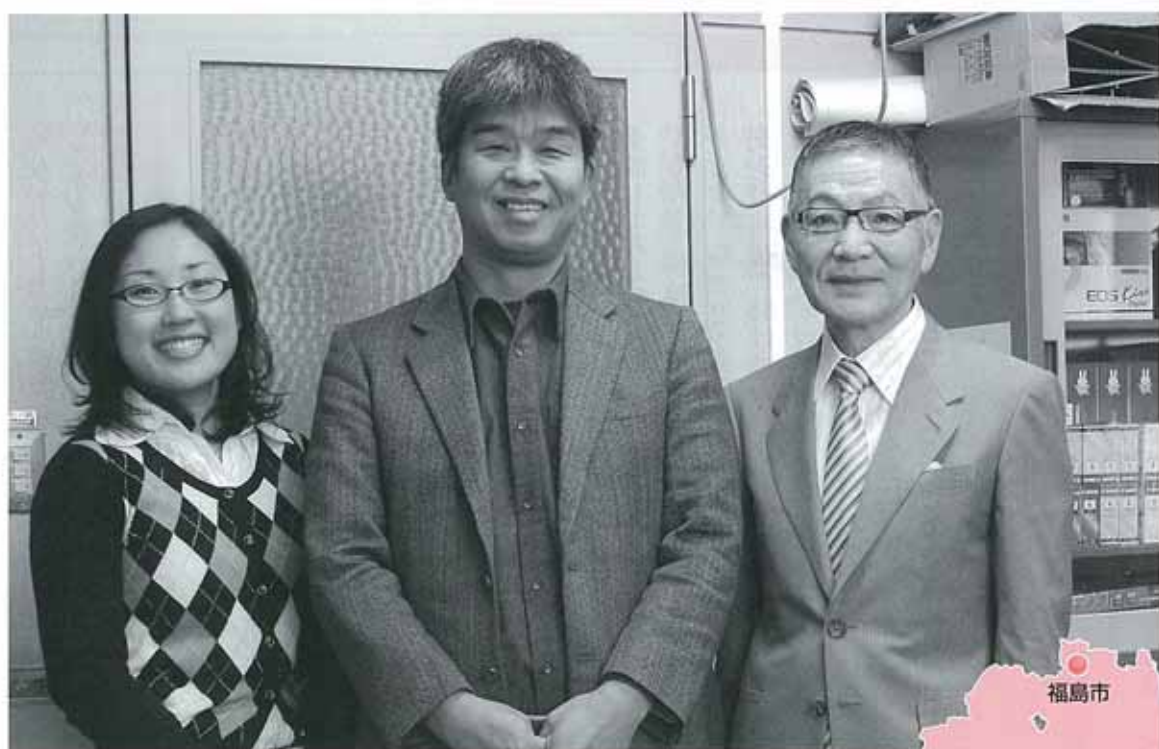


みんなので育てる地域福祉

NPO法人 福島スクールソーシャルワーカー協会

福島市



福島市

学校と家庭、地域をつないで、 子どもたちとその家族を支援する

～子どものニーズにより近づくためのSSW～

取材協力

福島大学 大学院人間発達文化研究科
教授 鈴木庸裕 研究室
NPO法人福島スクールソーシャル
ワーカー協会
〒960-1296 福島市金谷川1番地
TEL 024-548-8114

子どもの力を引き出し 環境にも働きかける

子どもたちの問題行動には、学校だけではなく家庭や地域など、様々な環境要因が複雑に絡み合い、影響しています。例えば、保護者のネグレクト(育児放棄)で朝食を食べずに登校し、学業が不振になる子どもがいます。また、発達障がいの特徴が周囲に理解されないために学校になじめず、長期的な不登校につながっていくケースもあります。

環境が子どもの発達に与える影響は多ですが、子ども自身の力で環境を変えていくことは非常に困難です。子どもの力を引き出すと同時に、学校や地域などが、これまでは別々に対応してきた課題を一つにまとめ、家族や学校関係者、さらに様々な専門職と連携して環境に働きかけて必要な支援へとつないでいこうとするのが、スクールソーシャルワーカー(以下SSW)の取り組みです。今回の事業により、教育分野に関

長期欠席や児童虐待、発達障がいにより特別な支援が必要な子どもや家庭への対応など、学校には福祉的な課題が数多くあります。当事者である子ども達の人権を守り、支援するための取り組みとして、スクールソーシャルワークが全国的に広がり始めています。平成20年度からは、福島県内8地域でも「スクールソーシャルワーカー活用事業」が始まりました。

する知識に加え、社会福祉等の専門的な知識や技術を有する人材が県内各地に配置されました。

民生委員をはじめ 多職種と連携しながら



たかだよし
高田宣實さんは28年の教員生活などを経て、SSWとして活躍しています。

郡山市教育委員会のSSW、高田宣實さんもその一人です。高田さんは、児童虐待の対応にあたること少なくありません。具体的には、学校から「夏休みが終わった後に、体重が急激に減少している児童がいる」という情報が寄せられた場合には、まず家族構成を調べて、きょうだいの通う学校や民生委員、保健師等に連絡して情報を集めていきます。

「なかでも、民生委員さんは地域の歴史・家族の歴史・それから心情的

スクールソーシャルワーカー(SSW)活用事業



昨年8月には日本学校ソーシャルワーク学会とNPO福島県スクールソーシャルワーカー協会の共催で、研修会を福島市で実施しました。

などところまで多くの具体的な情報を持った大事なパートナーです」と高田さん。「あの子は、問題を起こす困った子どもではなく、困っている子どもなんだよ」と教えてもらって、大切な判断を間違えずに済んだことが、これまでも数多くありました」と話します。

家庭が経済的に困窮している場合は、市の福祉課や福祉事務所につないで生活の安定を図ることもあります。さらに、必要に応じてSSWは児童相談所や警察、社協、子育て支援団体、医療機関などにも働きかけ、協働に向けたコーディネートを進めていきます。

「なるべく思春期前の段階でSSWを活用したい」

SSWの配置や活用は各自治体によって異なり、高田さんは郡山市教育支援センターに常駐し、派遣要請を受けて各所に向かっています。

一方、伊達市と本宮市教育委員会のSSWを兼務している宮地さつきさんは、曜日で勤務地を分けた巡回型の相談支援を行っています。宮地さんは、「中学校では圧倒的に不登校対応が多く、関わった時点ですでに長期化していることが多い」ことを実感しているそうです。

小学校の段階の方が学校と保護者との関わりが作りやすく、民生委員や保健師なども連携しやすいという現実を踏まえ、宮地さんは「思春期前のなるべく早い段階で、SSWを活用してほしい」と呼びかけます。

「不登校にも、様々な背景があります。それを知っているのはやはり地域の方々です。民生委員さんからも、SSWに気軽に声をかけてもらい



「民生委員さんと自然体で話す機会をもちたい」と話す宮地さつきさんは、社会福祉士資格を持つSSWです。

地域福祉の担い手としてSSWがもつ可能性

たいと思っています」と宮地さん。



「地域の困難を予防する手立てである『地域福祉』に、教育領域から関わりをもつのがSSW」と鈴木庸裕教授。

今回の事業で、SSWに対して助言をするスーパーバイザーを務めるのが、福島大学の鈴木庸裕教授です。

自らもSSWである鈴木教授は、平成18年にNPO法人スクールソーシャルワーカー協会を立ち上げ、SSWの資質向上を目指す研修や勉強会を行ってきました。「一人の人間の生活の全体性に着目すると、子どもは家庭の一員であり、さらに地域の一員です。学校に任せきりだった学齢期の社会福祉を、地域からも見ようとするSSWは、地域の社会福祉化という潮流にある動きです」と鈴木教授。「いずれはSSWが、地域の福祉文化を創出する担い手の一人として、多くの人と課題を共有し、プランを立てて実行し、検証する存在にまで高まっていくしてほしい」と話していました。